松浦理英子

裏ヴァージョン

裏ヴァージョン

松浦理英子

松浦理英子◆*Rieko Matsuura*

1958年愛媛県松山市生まれ。青山学院大学文学部仏文科卒業。
在学中に「葬儀の日」で文學界新人賞を受賞。
小説に『葬儀の日』『セバスチャン』『ナチュラル・ウーマン』『親指Pの修業時代』(女流文学賞受賞)、
エッセイ集に『優しい去勢のために』『ポケット・フェティッシュ』『おぼれる人生相談』がある。

裏ヴァージョン

2000年10月5日　初版第1刷発行
2001年1月25日　初版第5刷発行

著者■ 松浦理英子
装幀■ ミルキィ・イソベ
発行者■ 菊池明郎
発行所■ 筑摩書房
東京都台東区蔵前2-5-3 〒111-8755
振替 00160-8-4123
印刷■ 三松堂印刷
製本■ 積信堂
JASRAC 出0011617-005
ISBN4-480-80358-0 C0093
©Rieko Matsuura 2000　printed in Japan
定価はカバーに表示してあります
乱丁・落丁本及びお問い合わせは下記へお願いいたします
〒331-8507 大宮市櫛引町2-604 筑摩書房サービスセンター
☎048-651-0053

裏ヴァージョン・目次

1 ◆ *including* : <オコジョ> ◆4
2 ◆ *including* : <マグノリア> ◆16
3 ◆ *including* : <メイベル> ◆28
4 ◆ *including* : <トリスティーン> ◆41
5 ◆ *including* : <トリスティーン(PART2)> ◆53
6 ◆ *including* : <トリスティーン(PART3)> ◆65
7 ◆ *including* : <質問状> ◆77
8 ◆ *including* : <ワカコ> ◆90
9 ◆ *including* : <ジュンタカ> ◆103
10 ◆ *including* : <千代子> ◆115
11 ◆ *including* : <詰問状> ◆128
12 ◆ *including* : <トキコ> ◆139
13 ◆ *including* : <マサコ> ◆151
14 ◆ *including* : <マサコ(PART2)> ◆163
15 ◆ *including* : <ANONYMOUS> ◆175
16 ◆ *including* : <果たし状> ◆187
17 ◆ *including* : <鈴子> ◆198
18 ◆ *including* : <昌子> ◆210

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

裏ヴァージョン

1

第一話　オコジョ

ステファニー・クイーン

けだものは耳を伏せ丸めた背筋の毛を限界まで逆立て、ハーッと激しく息を吐いた後も、いつでも飛びかかれるように前肢をたわめたまま、険悪に細めた眼をアーネストから離そうとしなかった。アーネストの方も、全身の力を眼に集めて思いきりけだものを睨みつけた。しかし、アーネストの頭よりもやや高い本棚の天辺に乗ったけだものは、自分の方が有利な位置にいると確信しているのか、怯むどころか眉間の皺をいっそう深くして眼下の敵を見下ろす。アーネストは睨み合いに負けたくなかった。だが、無理な力を込めた眼はすぐに凝って来て、鼻の付け根から頭の奥にかけてつんとした痛みが走った。用心深く数歩下がりながら、凝った眼をぎゅっと閉じる。瞼の裏がちかちかし、一瞬眩暈を覚える。眼を開けると、けだものはまだ同じ姿勢でアーネストを見つめていた。

痛いのは鼻や頭ばかりではなかった。さっきけだものの鋭い爪で引っ掻かれた右手の手頸からは生温かい血が滴っているし、同じように一撃見舞われた顎先も皮膚が裂けてきりきり痛む。ダンガリーのシャツの胸元に血の染みができているのを知って、またも怒りが込み上

げて来る。――このけだもの、どうしてくれよう！　だが、気を落ちつけないことには報復もできない。そう思って一呼吸し、さらに一歩退くと踵が何かを踏んだ。床に転がったワインの小瓶、その曲面に沿って滑った足が放り出されるように前に飛び出し、アーネストの尻は派手な音をたてて木の床に打ちつけられた。畜生！　ワインの小瓶をけだものめがけて投げる。けだものがびくりと身を縮める。けれども、狙いははずれて小瓶は本棚の縁にぶつかった。破裂音とともにきらきら輝くガラスの破片と薄赤いしぶきがアーネストの上に降りそそいだ。

きっかけは、夕食を始めようとしたアーネストが、テレビの向きを調節するためにダイニング・テーブルを離れた間に、けだものが皿からラム・ローストを一切れ掠め取ったことだった。食卓の上の物に手を出すなという小言は再三繰り返していたはずだった。それなのに、キャット・フードだけでは満足しない貪欲なけだものは、始終ダイニング・テーブルに上がって来ては隙を見て人間の食べ物を奪い取る。

「おいおい、がっつくなよ。」

腹立ちを抑えて、けだものが咀嚼の音をたてるテーブルの下を覗き込んだ。けだものはちらりと暗い視線をよこしたが、また何事もなかったように獲物を噛み始める。いつものことではあった。だが、今日に限ってはそのふてぶてしい態度が癪に障り、ラム・ローストを奪い返そうと手を伸ばしたところ、がぶりとやられた。かっとした。けだものの頸筋を掴んで

テーブルの下から引きずり出し、平手で一発頭を叩いた。二発目を繰り出そうとした時、並みの猫の一・五倍くらい大きくしかも異様に筋肉の発達したけだものは、体をくねらせて鮮やかにアーネストの指を振りほどき、逆襲の爪を彼の手頸にふるったのである。

それからの事細かな経過は憶えていない。逆上したアーネストは意地でもけだものに体罰を加え思い知らせてやろうとして、逃げるのを追いかけまわした。けだものはテーブルの下をくぐって椅子に跳び上がり、続いてテーブルの上に跳び移ってワインの小瓶を転がした。アーネストはフットボールの選手のようにけだものにタックルをかけ、ラム・ローストの載った皿やワイン・グラスを吹っ飛ばした。けだものに覆い被さりかけたあの時顎をやられたのだろうか、何度かは奴を部屋の隅に追い詰めたのだったか、蹴り出した足があいつの横腹にでも当たっただろうか、定かではないが、気がつくとけだものは本棚の天辺に位置を定め、アーネストはそれを呆然と見上げていた。引っ掻き傷の痛みをこらえながら。

だから猫なんか家に入れるべきじゃなかったんだ——アーネストは苦々しく思い返す。いや、ペット・ショップで売られていたり知り合いの家で生まれた猫を、性質のよしあしを確かめた上で引き取るのならいい。野良猫だって、あっちからすり寄って来るような人なつっこい奴だったら、慈しんで育てることができるだろう。ところがサラ——あの身勝手な女！——は、ここいらをうろついていた、人に馴れていない仔猫を、全体は白だが頭頂部から尻尾の先まで刷毛で一本線を引いたように濃い灰色の毛が生えている柄が気に入ったという理

由で、飼ってくれと言い出したのだ。「やめておこうよ。ああいうのは、いつまでたっても本当にはなつかないぜ」と何度も諭したのに、サラは頑として聞かなかった。「あの猫を飼うことができたら一緒に暮らしてもいいわ」というあいつのことばに屈服してしまった俺も馬鹿だったけれど。

サラと暮らしたい一心で、アーネストはどんなに疲れていても毎日朝と晩、キャット・フードの缶詰をかかえて仔猫のいそうな場所を探したものだった。二十三歳のアーネストにとって、サラはしばらくぶりにできたガール・フレンドであり、女性に対して比較的内気なアーネストに、自分の方から連絡を取って会おうとしてくれる初めての積極的な相手だった。仔猫と出会う可能性がいちばん高いのは早朝のゴミ集積所、もちろん人の気配がすると逃げるので、近くの路上に蓋を開けた缶詰を置きさりげなく離れて見守る。第一にこちらの顔を憶えさせ、時に声をかけ、安全な人間だと印象づけて、だんだん距離を縮めて行くつもりだった。名前もつけた。ずっと前、サンディエゴの動物園で知り合った日本からの旅行者の女の子に教えられたイタチの一種を指す日本語で、〈オコジョ〉と。当時は痩せていて、ひょろひょろ動く仔猫は本当にイタチに似ていたのだ。

仔猫はやがて、アーネストの顔も自分につけられたオコジョという名前も憶えたようだった。それだけではなく、いつの間に知ったのか、アーネストの家の戸口まで来て食べ物を待つようにもなった。しかし、触れられるのは断固として拒み、アーネストが撫でようと手を

伸ばすとハーッと声をたてて小さいが鋭い牙を剥き出しにする。何週もそういう日々が続き、業を煮やしたアーネストはとうとう強引な手段に訴えた。猫が中に入ると自動的に扉が下りる小箱を作って、キャット・フードに釣られてまんまと中に入ったオコジョを、箱ごと家の中に連れ込んだのである。充分には馴れていなくても連れ込んで逃がさないようにしておけば、顔をつき合わせているうちにどうにか親愛の情が通い合うようになるのではないか、という考えだった。それが甘かったことは後に思い知ったのだが。

アーネストは本棚の隣に並べたロッカーからモップを取り出した。柄を強く握り締める。「オコジョ。」呼びかけるとけだものは片耳をぴくりと震わせる。「俺とおまえと、どっちの方が強いかためしてみようか？」

モップをかまえてけだものに突きかかる。予測していたことだが、角度が悪くまっすぐに強くけだものを突くことはできない。しかし、けだものはやや慌てて本棚の上を右往左往する。優位を回復したアーネストは微笑みかける。するとちょうどその時、敵に大した攻撃はできないと見抜いたけだものは、本棚の端まで移動して鼻先をつんと上げ胸を反らすような姿勢で動きを止めると、蔑みを込めたとしか思えない眼をアーネストに向けた。アーネストはまた頭に血が上るのを覚えた。引っ掻かれようが噛みつかれようが、あいつを捕まえてやる！　アーネストはけだものに向かって素早く跳躍した。指先にけだものの毛を感じた。が、摑めたのは空気だった。けだものは——本棚よりもいくぶん低いロッカーの上に跳んでいた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

驚いてそっちを向いたアーネストの顔に、けだものがどす黒い影となって突進して来た。
アーネストは上体をのけぞらせた恰好で吹っ飛び、ダイニング・テーブルにぶつかってそれを倒した。左眼に強烈な痛みが起こった。咄嗟に眼は閉じたはずだ。だが、あきらかに爪は瞼だけではなく角膜も傷つけていた。腰も後頭部も打ったが何よりも痛むのは眼、アーネストは悲鳴とも唸り声ともつかない音声を絞り出しながら床を転げ回った。転げ回りながらも、止まるな、止まるとあいつが襲って来る、と思い、懸命にチェストのあるあたりに這いずって行く。辿り着くと、引き出しからタオルを取り出し左眼を覆うように頭に斜めに巻きつける。すぐにタオルにじわりと血が吸い取られるのがわかる。アーネストは初めて疑った。あいつは俺より強いのか？
滲み出した脂汗を拭いながら立ち上がり無事な右眼で見回すと、けだものはまた本棚の上に戻っていた。こっちを向いてはいるが、さっきまでよりも余裕があるようで蹲っている。アーネストはけだものを刺戟しないようにゆっくりとした動作で窓辺に行き、窓を開け放った。今日は昼過ぎから天気が崩れた。激しさを増した雨風が暗闇から吹き込んで来る。冷気に身震いしたアーネストは、窓辺を離れ部屋の中央あたりに立つ。
「行け。」けだものに声をかける。「好きな所に行けよ。おまえはここにいたくないんだろう？」
けだものは大儀そうに開け放たれた窓の方に首をめぐらせ、寒くなって迷惑だと言いたげ

に身をすくめて蹲り直す。
「おまえを連れて来たのは俺の間違いだった。悪かったよ。だから今日限り出て行ってくれ。」
けだものは辛抱強く寒さに耐えてじっと伏せている。どうして出て行かない？　アーネストはもう一刻たりとも、この凶暴なけだものと一緒にいたくないのだった。足元に倒れていた椅子を掴み、本棚の真ん中めがけて投げる。大きな音がして、両親からもらい受けた古い木製の椅子はばらばらになって落ちた。けだものは動じない。自分の方が強い、アーネストなど恐れるに足りない、とわかっているのだ。お揃いの椅子をもう一脚投げる。そっちもまた、けだものには何の効果も与えないままばらばらに崩壊しただけだった。俺には猫を追い出す力もないのか。アーネストの胸に情けなさが込み上げた。
こんな猫をほしがったのは俺じゃないのに。今はサンタモニカで大衆向けレストランの経営者と暮らしているサラのことを、アーネストは思った。出し抜けに「ねえ、私たち、そろそろ別の道を行かない？」と切り出されたのは先月のことだ。お決まりの実りのない話し合いの最後の方で「オコジョはどうするんだ？」と訊いてみたが、「あなたが世話をしてよ」という返事だった。そんなことなら初めからほしがらなければよかったんだ。オコジョのおかげで俺たちは一緒に暮らせたんだけど。
猫が家に来た、と告げるとサラは即座に身の回りの品を持ってアーネストの家にやって来

た。第一日目、小箱の蓋を開けても一歩も外に出ようとせず、餌さえも箱の中へ押し遣ってやらなければ食べる素振りを見せない、恐怖と怒りに身を硬張らせたオコジョの様子に、「こんなのを望んでたんじゃないわ」と文句をこぼし、二日目、二人が仕事に出ている間に小箱から出たオコジョが、ダイニング・テーブルの椅子を倒し、ベッド・カバーをびりびりに引き裂き、窓のブラインドを破壊し、さらに床一面に大小便を撒き散らしたさまを眼にした時には顔から血の気が引いていたものの、サラは同居を取りやめるとは言い出さなかった。

オコジョが破壊活動をするたびに二人は黙々と後始末をし、決して怒らず、無理に触れようともせず、食べ物はふんだんに与え、愛情と誠意を示したつもりだった。オコジョが二人のいる時でも小箱から出て来るようになったのは捕まえてから約三箇月後、その頃にはそうひどい破壊活動もしなくなり、トイレの場所も定まった。だが喜びは長くは続かなかった。半年たっても一メートル以内には近寄って来ず、食べ物をねだる時もじっと睨むだけで甘い啼き声一つ上げない、撫でようとすると飛びすさるか爪を立てる、常に眼を三角に険しく吊り上げている、そんなオコジョにサラは愛想を尽かし、しだいに手なずけようという努力もしなくなった。

こいつがなついていればサラは出て行かなかったかも知れない。だからといって、オコジョを恨むわけじゃない。勝手に連れ込まれ戸外の気ままな暮らしを奪われたオコジョに、俺たちになつく義理はないんだから。アーネストはよろよろと歩いて壁際のベッドに腰を下ろ

した。サラ。ハイ・スクールを中退した自動車修理工の俺と、情熱的につき合ってくれたサラ。二十一の時に土台から屋根まで自分一人の作業でつくった町はずれのこのちっぽけな俺の家に、一年も住んでくれたサラ。いつかは雇われの身分じゃなく自営の修理工になりたい、と言った俺を優しく励ましてくれたサラ。アーネストはベッドに横たわり、眼を閉じた。サラ、サラ、眼が痛いんだ、病院に連れて行ってくれないか。

胸元にどさりと重みが来たのと同時に、喉元に衝撃を受けた。いつの間に忍び寄ったのか、獣臭い匂いをたてるオコジョがアーネストの頸に喰いついていた。反転しながら手でけだものを払おうとした。気管がよじれそうなくらい喉が引きつり、体がベッドから転がり落ちた。びりっという嫌な音がして口中に血が噴き上げて来た。ひどく咳込んだアーネストは床に血が吐き散らされるのを見た。息を吸うとびゅう、という音がした。喉から湧き出した血がつうっとシャツの襟元に流れ落ちる。何だ、これは？　床にへたり込んだままどこやら虚ろな気持ちで眼を上げると、けだものはベッドの上から低い体勢でなおも攻撃のチャンスを窺っている。

殺す気か？　俺を殺したいのか？　けだものの緑色の眼ははっきりと憎しみに燃えているように思えた。でも、どうして？　食卓から盗み食いをした飼い猫をひっぱたくくらい、どこの家でもやってるじゃないか。そんなことで怒った猫が殺人に走ったなんて話は聞いたことがない。それともこれは、以前からの恨みの爆発なのだろうか。意思に反してこの家に閉

じ込められた恨み。今日一年ぶりに窓が開き自由な生活を取り戻せるのがわかっても、恨みを晴らしてからではないと出て行きたくないというのか。

けだものがまた飛びかかって来た。上体を横倒しにしてよけたが、爪が額の右側を引っかけた。今度は無事な右眼の方を狙われたのだ。どすん、と野卑な音をさせて床に着地したけだものは、ベッド脇のサイド・テーブルに跳び乗ってかまえる。アーネストの胸にもオコジョへの憎しみが噴き出した。ああ、確かに俺はおまえに悪いことをしたよ。だけど、いつもまずまずのキャット・フードをたっぷり与えたし、ピュア・ウールの毛布の寝床をしつらえてやったし、虫下しの薬も蚤取りの薬も医者からもらって来たし、爪研ぎも自由にさせたし、上って遊べる猫用アスレチック・タワーも手作りしてやったじゃないか。それなのに、殺したいほど俺が憎いのか？　じゃあ、俺もおまえを憎んでやる。

けだものの牙は頸動脈には刺さらなかったようだ。俺は死ぬことはない。死ぬのはおまえだ！　奇妙な昂奮に囚われたアーネストは勢いよく立ち上がり、倒れているダイニング・テーブルの脚を右手と左手で一本ずつ摑むと、けだもののいるサイド・テーブルに放り投げた。大音響、床を震わせる震動、ダイニング・テーブルは天板を下にして床に落ち、サイド・テーブルの上にあった電話機や灰皿はどこかにすっ飛んでいた。猫は――姿がない。ベッドの上にも本棚の上にも床にもいない。アーネストは窓辺に駆け寄り、雨風が傷に沁みるのもかまわず身を乗り出した。出て行ったか？　窓に面した空き地に照明設備はなく、三十メート

ルほど離れた隣家の塀も暗闇に沈んでいる。まだ近くにいればオコジョの白毛が暗がりにぼんやりと浮かび上がるだろうが、何も見えなかった。

二十分、いや三十分もアーネストは、何度となく室内を振り返りながら窓辺に佇んでいた。けだものの気配はどこにもなかった。行ったに違いない。安堵とともに苦笑が浮かんだ。大の男が猫になんかしてやられるはずもない。わかりきったことじゃないか。そう、出て行ってくれさえすればいい。いっとき憎しみに駆られたって、生き物を本気で殺したいわけじゃない。アーネストはひっくり返ったダイニング・テーブルを跨いで、ベッドに腰かけた。病院に行かなくては。救急車を呼ぶほどではない。電話帳で急患を扱っている病院を探して、タクシーを手配して——。猫にやられたと言って医者に信じてもらえるだろうか。

血に汚れたシャツを着替えようとボタンに手をかけた時、ふっと思い当たった。ベッドの下は調べていない。もしや——安堵が再び不安へと移ろった。あいつがベッドの下にひそんでいて、病院から帰った俺が寝入ったところを執念深く襲って来たら——。アーネストはそろりと腰を上げ、ベッドのそばに膝をついた。心臓がどきどきし始めた。オコジョの憎々しい顔つきが眼に浮かんだ。怖い。もしいるとしたら見たくはない。しかし、確かめなければ今夜安心して眠れない。だけど、覗き込んだ途端に攻撃して来たら。いや、いるはずはない。何を臆病風に吹かれてるんだ。

アーネストはモップを拾って来てベッドの下に突き入れた。ベッドの下には普段使わない

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com